

富岡美子作 「親友」

山田圭子　　ごめんごめん。由美、待った？ 先に学校行ってもよかったのに。

星野由美　　そんなに待たなかった。独りで学校行くより圭子と一緒にいったほうが楽しいし…。

圭子　　(さえぎるように)本当にごめん。昨日、夜遅くまでラジオ聴いてたら、寝坊しちゃってさ。

由美　　そう。

圭子　　そんなわけでさ、リーダーの予習やってないのよね。由美のクラス、リーダー何時間目だったけ？

由美　　2時間目よ。

圭子　　よかったあ。由美たちのほうが進んでるでしょ？ あたしたち、3時間目なの。由美、ノート貸してくれない？

由美　　いいわよ。

ナレーション　　星野由美と山田圭子は、青春高校の1年生。二人は性格はまるっきり正反対でしたが、中学時代からの親友同士。高校に入ってクラスは違っていましたが、学校の行き帰りはもちろんのこと、クラブ活動も同じでした。

効果音　　(終業のチャイム)

先生　　これで終わりにする。

生徒　　起立。礼！

効果音　　(ガヤ)

由美(モノローグ)　　あーあ、やっと終わった。今日は掃除当番じゃないし、クラブもないし、帰ろうかな。圭子はまだ掃除してるかな。ちょっと見てこようっと。

由美　　あの一、圭子まだいる？

女生徒　　圭子？ 圭子だったら授業終わってすぐ恵理子と一緒に帰ったみたい。由美、一緒に帰らなかったの？

由美　　うん。(モノローグ)圭子、どうしたのかな？ 今朝は何も言ってなかったのに。そう言えば、この間も黙って恵理子と一緒に帰ったわ。どうして？ どうしてなの、圭子？

ナレーション　　次の日、学校で――。

圭子　　由美、おはよう。今日、遅刻しちゃってさ。今朝もだいぶ待った？ いつも待たせてごめん。

由美　　(怒ったように)別に、いいの。

圭子　　ああ、そうだそうだ。(間)はい、交換ノート。遅くなっちゃったけど、あとで読んで。

由美　　うん。圭子、昨日どうしたの？

圭子　　昨日？ 昨日何かあったっけ？

由美　　昨日、黙って先に帰っちゃったじゃない。

圭子　　なーんだ、そんなこと。昨日は恵理子と映画見に行く約束してたのよ。由美、どうしたの、そんな怒った顔して？ かわいい顔が台無しよ。

由美　　別に怒ってなんかいない。ねえ、どうして黙って帰ったりなんかするのよ。あたしたち、親友でしょ？

圭子　　そうよ、親友よ。親友と黙って帰ることとどういう関係があるの？

由美　　あたしたち、中学の時からいつも一緒だった。それなのに、最近、圭子はあたしなんかより

…。

- 圭子 何が言いたいなのよ？ グズグズしてないでハッキリ言いなさいよ。
- 由美 圭子はいつも恵理子や中村君と楽しそうに話してる。あたしといるよりもずっと楽しそうにしてる。(間)あたしはそれがイヤなのよ。
- 圭子 別に構わないでしょ、あたしがだれと話そうと。友達がたくさんいたほうが楽しいじゃない。由美もあたしのほかに友達つくったらいいでしょ。
- 由美 あたしは、圭子だけで…。
- 圭子 じれったいわね。この際、ハッキリ言わせてもらうけど、あたしはね、由美に縛られたくないわ。由美と話していると、何かイライラしてくるのよ。それにさ、由美の話したらいつも沈んだような話ばかりじゃない。あたしまで気がめいて疲れるのよ。それからね、由美、あたし今まで可哀そうだと思って我慢して言わなかったけど、あんた、ちょっと自分勝手よ。いつも自分のことしか考えてないじゃない。交換ノートに書いておいたけど、あたし、由美との交換ノート、もうやめる。今度は恵理子と始めることにしたの。恵理子のほうがずっと楽しいし…。
- 効果音 (由美がノートを落とし、そのまま走り去っていく足音)
- 山口 おい、どうしたんだ、どうしたんだ？ 今、星野、すごい顔してあっちへ走っていったけど。
- 圭子 知らないわよ。
- 山口 おい山田、ちょっと言いすぎじゃないのか？ あれじゃ星野が…。
- 圭子 いいのよ。本当のことなんだから。由美には、ハッキリ言わなきゃ分からないのよ。あたしがだれと友達になろうと構わないじゃない。
- 山口 そりゃそうだろうけどさ、星野にはお前しか友達いないんじゃないか？ なんか、かわいそうだな。
- 圭子 だったら山口君、友達になってあげたら？
- 山口 冗談じゃないぜ。あんなムツツリしたやつ。
- 圭子 あたしはね、ずっと我慢してきたのよ、由美の勝手さに。この辺で由美に反省してもらわなきゃ。大体由美はね、話すのは自分のことばかりで、あたしの悩みなんてほとんど聞いてくれたことがないのよ。
- 山口 そんなに怒るなよ。ま、お前と星野がケンカしたってさ、おれには関係ないけどね。
- ナレーション 圭子に決定的なことを言われた由美は学校を飛び出し、町中をさまよい歩いていました。
- 由美(モノローグ) (泣きながら)圭子のバカバカバカ。中学の時はいつも一緒に、あたしのお話を真剣に聞いてくれたじゃない。もっと優しくしたのに。圭子だけはあたしのこと、本当に分かってくれると思ってた。それなのに…。親友だなんて言いながら、、やっぱり圭子だってみんなと同じなんだわ。だれもあたしのことなんて…。あたしと友達になってくれる人なんていない。やっぱりあたしは独りなんだ。もしいい、友達なんて欲しくない。
- 大山先生 (通りの向こうから)あれ、君はもしかして星野由美じゃないか？
- ナレーション 泣き顔で歩いている由美に声をかけたのは、彼女が中学1年生の時担任をしていた大山先生でした。由美は大山先生だと分かったと、一目散に走り出しました。
- 大山先生 (遠くから)星野、星野！ (近づいた由美に)おい、どうしたんだ、星野？まだ学校終わってないんだろう？鞆も持たずにこんな所をフラフラして。さっき通り過ぎた時、あまり君とよく似てるものだから、声をかけてみたんだ。そうしたら急に走り出すだろう。一体どうしたんだ、君のようなまじめな生徒が？

由美 ……。

先生 黙ってちゃ分からないだろう。一体何があったんだ？

由美 別になんでもありません。

先生 なんでもないのに、どうしてこんな所をフラフラしているんだ？

由美 先生には関係ありません。それより先生こそ、こんな時間に何してるんですか？

先生 わたしか？ 今日学校休みなんだよ。それでちょっとこっちの方に用事があったものだから。それより星野、早く学校へ戻りなさい。

由美 学校なんて、学校なんて戻りたくありません。学校へ行ったって、友達はいないし、だれもあたしのことなんて…。あたしなんか、いてもいなくても同じなんです。

先生 何を分からないこと言ってるんだ。友達がいないだって？ 確か星野といつも一緒にいた山田圭子も同じ高校に入ったんじゃないのか？

由美 (怒って) 圭子なんか、圭子なんか、あたしの友達なんかじゃありません。

先生 どうしたんだ、急に怒り出して？ もしかしてその山田とケンカして学校飛び出してきたんじゃないのか？

由美 そんなこと、先生に関係ないでしょ。

先生 やはりそうか。でもな、ケンカぐらいで学校飛び出すやついるか？

由美 先生なんかに、あたしの気持ち分からないわよ。

先生 そう興奮するな。あそこにベンチがあるから、ゆっくり話してごらん。

ナレーション 由美は、ホツリホツリと、圭子とケンカしたこと、自分の思っていることを先生に話しました。

先生 (大声で笑う)

由美 先生、あたし、真剣に話してるんです。

先生 ごめんごめん。しかしな、星野、話を聞いていると、星野は全然悪くないみたいじゃないか。

由美 お説教ですか。お説教なんて聞きたくありません。

先生 それがいけないんだよ。たまにはね、人の話もよく聞きなさい。もっと落ち着いて考えてごらん。どうして山田がほかの友達と親しくなり始めたのか。君は自分のことしか考えてないんじゃないか？

由美 先生も圭子と同じこと言うんですね。

先生 星野、こういうこと考えたことあるか？ 「圭子が自分にとって親友であるように、自分は圭子にとって良い友達なんだろうか」って。例えばさ、星野は山田の悩みを真剣になって聞いてやったことがあるか？

由美 圭子の悩み…。

先生 そうだよ。星野に悩みがあるように、山田にだって悩みはあるはずだ。星野は、山田に自分のことを分かってもらいたいと思っている。山田だって同じようなこと考えてると思うよ。

ナレーション 由美はハッとしました。圭子のことなど、真剣に考えたことがほとんどなかった自分に気づいたからです。

先生 なあ星野、先生もそう言えば中学時代に君と同じような経験をしたよ。こいつだけは灯っていたやつに「お前の聞き役はもうたくさんだ」と言われてな。ショックだったけど、でもそのことを通して一つ大切なことを学んだよ。分かるだろ？

由美 え、ええ、なんとなく。

先生 「親友」という関係が成り立つためにはね、「対等」でなきゃダメなんだよ。受けるだけでなく、

与える部分もなきゃね。山田に本当に親友になってほしかったら、まず自分が山田の親友になろうと努力するんだな。聖書にね、こんな言葉があるんだ。「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」

ナレーション
由美

由美は、大山先生の言った聖書の言葉を道々かみしめていました。

(エコー)「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」か。でも、あたしの性格では、とても無理だわ。だけど、そのことを話したら、大山先生は「人にできなくてもイエス様にはできる」って言ってた。そうだ、今度、先生の行ってる教会に行ってみよう！

<完>